

地中海を囲む善意

ロータリアン誌
2月号より

RI 会長主催 地中海地域親善会議略報

Goodwill around the Mediterranean by Marc Levin

欧州や中東諸国のロータリアンはどのようなことを考え、どのような活動をしているのだろうか。昨年11月11日～13日フランスのニースで開かれた、RI 会長主催地中海地域親善会議の略報にその一端がうかがわれて興味深い。来るべきRI 会長主催日韓親善会議の参考にもなるだろう。

1918年11月11日という日は、特にフランスにとって忘れることのできない記念日である。この日は数百万の死者傷者を出し、欧州の交戦諸国を廃墟と化した第一次世界大戦の終結記念日である。

意図的ではなく、偶然にこの第一次大戦終結記念日に、RI 会長主催地中海地域親善会議がフランスのニースで開かれた。この会議には、地中海沿岸地域の12カ国から、211人のロータリアンと76人のゲストが参加した。参加したロータリアンのなかには、その母国が深刻な社会的政治的問題を抱えて分裂している国もあったが、理解と平和という共通の目的をもってロータリーのこの友好の話し合いに集ったのである。

この会議が地中海沿岸のニースで開かれたこと自体幸先のよいことであった。なぜなら地中海沿岸は世界の偉大な文明と宗教の揺籃の地であり、人間が果し得る偉業、そしてまた人間がなし得る破壊の姿をいまなおまざまざと留めている地域であるからである。

マッキャフリー RI 会長は、その開会演説において、この地域の文化そしてまたロータリーの歴史に繰返し言及し、この親善会議を開いても平和がすぐよみがえり、問題が解決されるわ

筆者紹介 マーク・レバンはフランスの地域誌 Le Rotarien の編集長、リヨンRC直前会長。

Photos: Marc Levin

ル・ロータリエン誌編集長

マーク・レバン

けではないが、会議が少なくとも事態の好転に役立つものであることを強調した。フランスとイタリアのロータリアンと一緒に会合することは珍しいことではない。だが、いつの日か中東地域のロータリアンが手を取り合って、青少年交換、あるいは家族の交換訪問などの活動を行ない、ロータリアン同士の間で一層理解と善意をふかめ、究極の目標たる平和に近づくことができるようにとの会長の悲願をこめたこの講演は参加聴衆の心に深くしみこんでいったにちがいない。

マッキャフリー RI 会長のこの切々たる基調講演によって、その後の会議の雰囲気はきわめて和やかなものとなった。会議の準備委員長を務めた元 RI 理事 Claude Chappat (フランス) をはじめ準備委員会のメンバー M. Bahir Onsy (エジプト)、Minas Vergis (ギリシャ)、Cetin-Gökceatam (トルコ)、L. Zachariades (キプロス) などの諸氏もプログラムの進行に最大限の努力を払って会議の成功に多大に寄与した。その他会議の成功にあずかって大きな力となったロータリアンは、ホストクラブニースRC会員をはじめ、Jacques Chauvin 現 RI 理事 (フランス)、そしてホスト地区の第173地区 Noel Cucchi 現ガバナーおよび Pierre Cresp バストガバナーなどである。

毎朝の本会議でとりあげられた議題は午後の討論会で掘りさげられ、その結果数々の決議、勧告あるいは提案が生まれた。たとえば12日午

前の本会議では、第173地区のM. Benmejdoub バストガバナーが、先進国および発展途上国間のGSEプログラムのよりひんばんな実施を訴え、ロータリー財団のプログラムを各地域の特別な事情に合うように調整する必要があることを力説した。そしてさらに「GSEは豊かな国と発展途上国との間で行なわれるのが現実的であり、一層効果的であるのに反して、現在のGSEの95パーセントまでが豊かな国同士の間で行なわれている。発展途上国の技術者が必死に先進国の技術の習得を欲しているのに、母国におけるロータリーの地区数が少なく、あるいは財団に十分な寄付をし得るほど豊かでないために、機会を与えられないことがある」とのべた。

この議題はその日の午後の討論会に持ちこされ、現在先進諸国から選ばれるロータリー財団奨学生の数、発展途上国のそれをはるかに上まわっていることが指摘された。議論はさらにつめられて、先進国と発展途上国の奨学生数がその逆になることがのぞましく、したがって財団奨学金の授与件数は、各地区の財団寄付金額にもとづいて決定されるべきではないとの提案が出された。討論参加者はまたロータリー財団は世界社会奉仕に対する特別補助金の枠を拡大すべきであるという点で意見が一致した。

そのあと討論は3-Hプログラムに移り、イタリアからフィリピンに贈られた数万人分の小児マヒ・ワクチンが周到な準備のもと、安全に包装されて、完全有効の状態で現地側に引渡された旨の報告があった。また現在RI理事会で検討中の全モロッコ児童に小児マヒ・ワクチンを接種する計画が満場一致で支持された。この計画が実施されると、イタリアをはじめ欧州諸国のロータリアンがワクチンならびにその接種に必要な医療ボランティアの確保に乗り出すことになる。

なお、ニースで開かれたこのRI会長主催地中海地域親善会議にはスペインのロータリアン多数が参加したことが注目される。スペインがロータリーに復帰して以来、同国のロータリアンがRIの国際的会合に公式に出席したのは今回が最初である。会議の席上RI管理顧問（地

区ガバナーに相当）としてスペインのロータリーの管理にあっているM. Busslinger氏より、現在同国には20近いロータリークラブがあって定期的に会合し、種々の奉仕活動を盛んに行なっている旨が報告され、満場の拍手を浴びた。

このあと議題は変って、地中海地域の環境汚染とその対策がとりあげられ、この面におけるロータリーの活動とPRの強化が提案された。

大会最終日11月13日の本会議では、テーマは再びマックヤフリー会長の提唱する「ロータリーを通じて世界理解と平和を」にもどった。そしてエジプトのOnsy元ガバナーが「この世に生をうけている人間で自由なものは1人としていない。まず我々は育ててくれた父母に借りと義務がある。さらに祖父母、曾祖父母とさかのぼっていけば、我々の先祖はみな共通のものとなる。我々は何千年にもわたって連続として生命を引き継いでくれたこの先祖に対する借りを返し、そしてまた無限の未来にわたって我々のあとに続くものために、義務を果していかなねばならない。そのために今日我々はこうしてこの場に集ったのである」とのべて聴衆に多大の感銘を与えた。

これらの会議における討論は多大の成果をあげたが、本会議や公式の討論会以外にひらかれた数多くの非公式な会合のほうにむしろある意味では重要であったかも知れない。これら非公式の会合のなかには夜間に及ぶまで続けられたものもあった。地中海地域諸国より参加したロータリアンはこれらの会合で胸襟を開いて語り合い、新たな友人をつくり、相手の立場に対して一層の理解を深めることができ、いかなる問題でも根底に善意があれば、解決の糸口をみつけることができるということをも悟ったのであった。

故国に帰ったこれらの参加者は、その僚友ロータリアンにそして隣人に、この会議の成果と意義を善意をもって語るにせよ。それは理解と平和を育む種となるかも知れない。奇しくも第一次大戦終結記念日にニースで蒔かれたこの種は、いつか全地中海沿岸で芽を出し、大きく育っていくことであろう。